

荒野の1日

劇団アクトライ

「荒野の一日」

脚本…清水大
演出…和田絢也

新潟県民会館 小ホール
2012.5.4 → 5.5

キャスト

石田…志摩智
瀬波…柏名史子
平沼…戸松裕之
柳原…樋口悠生
小川…藤原ゆずき

備考

・極力音響や照明は使用しない（変化しない）感じでお願
いします。

・脚本中の「」は、遮って言
うところですが。それ以降の台
詞は聞こえなくても構いません。

舞台は東京、しかし、何も無い荒野。災害か何かで、すべて荒れてしまった。また、謎の物質が空中を飛び回っていて、人間はシェルターの中でなければ生活できない。しかし、一部の人間は“進化”し、普通に生活ができる。

石田と瀬波、下手後方から登場。

それぞれ手に持っている機器（石田は釣竿、瀬波はモップ）を使い、探索している。照明は暗め、機器のLEDライトが目立つように。舞台中央センターまで来た時に、次の台詞。

石田
振り切ってる。

瀬波
こっちもです。

石田、少し周りを計測して、下手後方を指さして、

石田
よし、じゃあ瀬波、あの辺に置こう。

瀬波
はい。

二人、石田が指を差した場所に荷物を、最初に持っていた機器も一緒にまとめて置く。

石田
さて、何からやる？

瀬波
どうしましょうか？

この二人は、謎の物質により外に出れなくなった人達の代わりに、この荒野から様々な“思い出”を回収する仕事をしている。

石田 隊長からの指示は？

瀬波 んー、まだですね。

瀬波、腰につけた機械を取り出して見る。

瀬波 時間的にそろそろだと思っんですけど……

音響、アラーム音。

瀬波 あ、来ましたよ。

石田 お、どれどれ。

石田、瀬波の機械を覗き込む。

瀬波 もうちよっと待っててくださいね……あ、届きましたよ、再生していいですか？

石田 いいよ。

瀬波 じゃあ、いきますねー（ポチッ）

これ以降、隊長の台詞の間に台詞が挟まっているが、隊長の台詞は切らずに続けること。

隊長（声）（苛々するイントロ）やあ、隊員のみんな、隊長さんだよ。

瀬波 いつ見ても変な指令。

石田 ね。

隊長（声）さて、今日の指令は単純だ！ 君たちが今いる場所での、探索及び撤去業務だ。大型

撤去作業は行わなくていいが、どうしても必要な場合は、ヘルプコールだ、OK？

瀬波 大型はなし、と。

石田 そうだね。

隊長（声）それでは、無事に任務が終了することを祈る！ アディオス！

瀬波 持ってきちゃったんですけどね、大型撤去道具。

石田 No系？

瀬波 ええ。

石田 ま、その辺にほっぽとけばいいさ。それじゃ、適当に始めますか。

瀬波 そうですね。

石田 よし。（改まって）それでは、本日の業務を開始する。

瀬波 はい！

しばし沈黙

石田 え？

瀬波 え？

石田 いや、始めないの？

瀬波 ……あのー、一応、ちゃんとやりましょうよ。

石田 えー？

瀬波 真面目にやっついた方がいいですよ。

石田 でも、面倒くさいじゃない。

瀬波 他の人と組んだらどうするんですか。

石田 その時はちゃんとやるよ。

瀬波 そういう時に限って、ボロが出るんですよ。

石田 そんな事ないよ、

瀬波 さあ、まず場所からお願いします。

石田 えー、

瀬波 大体、私まだ今日の場所分かりませんし。

石田 あれ？ 言わなかったっけ。

瀬波 聞いてないですよ。

石田 あ、じゃあ、えっと〜

と言って石田、ノートを取り出して見る。

石田 E隊の第13石田班はっつ。担当地区はA特別区、E-23からE-27まで。

瀬波 はい。

石田 で、通常処分場は、E-25地区通常処分場、特別処理物はE-18地区特別処分場まで。

回収物はA-97保管場へ移動、だそうです。

瀬波 担当区分がE-23から27、通常処分がE-25、特別処分はE-18、回収物はA-97ですね。

石田 ああ。とりあえず、今回地区内にあるのは通常処分場だけだから、その他は持ち運びと
いうことだ。

瀬波 分かりました。
石田 じゃあ、今度こそ業務開始！
瀬波 はい！

二人とも、瓦礫をめくったりする。

瀬波 ないですね、なかなか。

石田 そうだなあ、前はもつと出てきたのになあ。

瀬波 そういえば石田さんは、今週からですよ。

石田 田地区？

瀬波 ええ。

石田 まあ、前は田地区だったからな。

瀬波 エリートじゃないですか。

石田 そんなことないって。大体、どの地区でもやること変わらないし。

瀬波 それでも田地区は憧れですよ。

石田 そう？

瀬波 ということは、この田地区を終わらせれば出世ですか？

石田 それはないだろー

瀬波 分かんないですよー、あ！

石田 どうした？

瀬波 虫の死骸。

石田 お、いいもの見つけたな。

瀬波 んーと（機械を当てて）。あまり高くはないですね、通常処分域です。

石田 そうか、ほら（腰から袋を渡す）。
瀬波 あ、ありがとうございます。（袋の中に虫を入れる）
石田 ラッキーだな、開始早々。
瀬波 そうですね、こんなに早いなんて。
石田 何もない日とかあるしなあ。
瀬波 ありますよねえ。その日の居心地の悪さと言ったら。
石田 ノルマ、達成しないとね。
瀬波 そうそう、もう、やめて欲しいですよね。
石田 ね。

石田、腰からスコップ（遺跡発掘用とかの）を取り出し、地面を掘る。

石田 何か出ないかなー。
瀬波 もうそれ使ってますか？
石田 だって、何も出てこないし……それに、なんか出そうな気がするし。
瀬波 そうですか……？
石田 相模さんがね、昔言ってたのよ。
瀬波 え、相模隊長とお知り合いだったんですか？
石田 ん、ああ。▽地区の時にね。
瀬波 ああ。
石田 この仕事で大事なものは♡つある。運と勘とあきらめだってね。
瀬波 ああ、分かります、それでしょ。
石田

瀬波 あ、そうだ。
石田 ん、どうした？

瀬波、 Δ 系とよばれる機械を鞆から取り出し、石田に見せる。

石田 お、 Δ 系じゃない。

瀬波 へへへ、勘ですよ、勘。

石田 いいねえ。

瀬波 これで私、大物見つけたんですよ。

石田 何々？（この辺から石田は手を少しずつ止め始める）

瀬波 何だと思います？

石田 んん、大物といえば、やっぱり……特別処分物系？

瀬波 それが、名目上は保管物なんですよ。

石田 保管物？

瀬波 ええ。でも鑑定では貴重な資料だって。

石田 へえ、凄い物見つけたじゃない。

瀬波 でしょー、それで、なんだと思います？

石田 そうだねえ。保管物区分で、研究資料になるのは……、カメラとか？

瀬波 あー、残念。カメラではないですね。

石田 うーん、じゃあ、日記？

瀬波 日記でもないですね、離れましたよ。

石田 ああ、そう？

瀬波 機械です、一応。

石田 機械系？

瀬波 一応は、ですけどね。

石田 んん、分からない。降参。

瀬波 答え、言っちゃってもいいですか？

石田 ああ。

瀬波 時計ですよ、時計。

石田 ああ、時計ね！

瀬波 なんと、こいつ（と言って、今使っている機械を客席に見せる）で見つけたんですよ！

石田 おお。

瀬波 それ以来、M系といえはこいつです。

石田 成程ね。

瀬波 石田さんは、何か特別なもの、見つけたことありますか？

石田 そうだねえ、特別なものとか、変なものとかは色々見つけた事はあるけど。

瀬波 へえ、例えは？

石田 変なもので、定番ものならカツラとか。

瀬波 え、ズラ見つけたんですか？

石田 そうなのよ。しかもきれいに残ってるの。

瀬波 あら。

石田 おまけに、着けてた本人のものと思われる髪の毛まであったからね。

瀬波 それってもちろん、鑑定しますよね。

石田 うん、しかも厄介なことに、持ち主、まだご存命だったのよ。

瀬波 あらく、それは相当恥ずかしいですね。

石田 だよ。

瀬波　でも……ズラって、外れてたりするといい難しいですよ。

石田　え？

瀬波　いや……この前おじさんの人と探索一緒になったんですけど……強風が吹いた時に、何が転がってって。

石田　まさか？

瀬波　今の何ですかねー、って言いながらおじさんの方見たら、

石田　ツルツルだったと。

瀬波　ええ。

石田　それは……大変だったね。

瀬波　笑いを堪えるのが大変でしたよ……しかも本人気がついてなかったですからね。

石田　もう俺なら笑っちゃうよ。

瀬波　まあ……石田さんならそうですね。

石田　え？

瀬波　いや別に？

石田　そう、何か聞こえた気がしたんだけど……

瀬波　知りませんよ、私は。

石田　そうか……でも俺なら、そういうのはちゃんと行ってほしいな。

瀬波　そうなんですか？

石田　うん、上着逆だよ、とか。

瀬波　ああ……そうなんですか（ニヤ↓客席に向けて）。

石田　ん、どした？

瀬波　石田さん……チャック、開いてますよ。

石田（慌てて）え、ウソ……ってこれツナギだから、ありえないじゃん！

瀬波 軽い冗談ですよ。

石田 なんだよー

瀬波 むしろチャックより、髪の毛が気になります。

石田 え？

瀬波 石田さん、ちよつとずれてるんじゃないですか？（といって髪を触ろうとする）

石田 い、いやいやいや、俺は別にズラじゃないし？

瀬波 そうですか？

石田 そうですよ！ むしろ何でそうなるかな。

瀬波 いや、ちよつとずれてる気がしたので。

石田 ずれてないよ！ っていうかズラじゃないよ。

瀬波 まあ、石田さんが禿げかどうかなんてどうでもいいんです。

石田 どうでもいいなら話題にしないでよ。

瀬波 で、他には、他には何か変なものありましたか？

石田 えー……スルー？

瀬波 何もなかったんですか？

石田 うーん、変わり物だと、あ、あれだ、便器。

瀬波 え？

石田 いやね、やけにでかい四角い箱があると思ったら、公衆トイレでさ。

瀬波 ああ。

石田 便器がね、いくつか出てきたことはあったよ。

瀬波 へえ、便器ねえ。

石田 しかもこの話、おまけがつくのよ。

瀬波 え？

石田 なんとね、便器の中に盗撮用のカメラが仕込まれててね。
瀬波 え〜!!
石田 相当貴重な資料として特別研究調査資料扱いになったらしいけど。
瀬波 まあ、普通に生活してたらお目にかかれない物ですからね。
石田 しかもその中身のデータ、研究資料だから何度も見かえされたんだぜ。
瀬波 え、写ってた人可哀想。女の敵よ、盗撮魔なんて。ね、石田さん？
石田 え？
瀬波 いや、女の敵だと思いません、そういう人。
石田 いやまあ、そうだけど。
瀬波 最低ですよね……石田さん？
石田 なんかさそれ、俺が最低な人みたいじゃないか。
瀬波 え？
石田 ……え？
瀬波 いや、別に何でもありませんよ。
石田 おいそれ、まるで俺が
瀬波 別に他人の性癖に口を出すつもりはありませんけど……犯罪はダメですよ。
石田 いやいや……俺じゃないって。
瀬波 誰も石田さんがやったとは言ってませんがね。
石田 おいおい……第一、この話には続きがあつてね。
瀬波 何です？
石田 なんと、それ、男子トイレにあつたらしいのよ。
瀬波 は？
石田 写ってたのが、全部男だったって聞いた。

瀬波 え〜。

石田 それを何度も見かえしてるんだぜ、男の研究員が。

瀬波 あー……そんな性癖もあったんだ……

石田 え？

瀬波 いや、盗撮だけじゃなくて、そっちもか……って。

石田 まあ、相当な変態なんだろうな。

瀬波 相当な変態なんですか？（石田を見つめる）

石田 なんだよ、俺別にそういう趣味な

瀬波 いや、別に私石田さんの話なんてしてませんよ。

石田 分かっているけどさ……

瀬波 分かっているならいいんです……

石田 ……？

瀬波 何ですか？

石田 いや、別に……何でもない……（間）というか、そろそろ、次の地区行かないか？

瀬波 ええ、この地区は大体探しましたし。

二人、荷物の場所に向かう。

石田 じゃあ、えーと、次は。

瀬波 あ、石田さん、こっちです。

石田 そうか。

二人、会話をしながら上手に去る。

柳原、下手から走って登場。

柳原 こっちですよ、平沼さん。

平沼、下手から登場。

平沼 早い、早いよ柳原君。

柳原 だって、初めてなんですよ！ フィールドに出るの。

平沼 あ、そうなの。

柳原 ええ。だから、こんな言い方するのもなんですけど、ちょっと楽しみで。

平沼（荷物を置くために、下手後方に移動しながら）おいおい、そんな事言っていると、例の大臣みたいに辞任させられるぞ。

柳原 そうですか？

平沼 ま、こんなところにまでマスコミは来ないけどな。（荷物を置いてから）あ、荷物この辺な。

柳原 あ、はい。（と言って平沼が荷物を置いた場所に荷物を置く）

平沼 やつら、あることないことでつち上げるからな。

柳原 そうなんですか？

平沼 そうよ。それこそその辞任した大臣なんて、まさに被害者よ。

柳原 え？

平沼 実際にはあんなこと言ってないのにさ、あたかも面白そうに言ったなんて言われて。

柳原 あー

平沼 俺あん時、あの現場にいたからね。

柳原 いたんですか！

平沼 そうだよ。だって俺はほら、最高処分執行責任者だからな、一応。

柳原 え、平沼さんって、そんなに偉い人だったんすか。

平沼 知らなかったのかよ。

柳原 だって、平沼さん一度も言わなかったから。

平沼 聞かれなかっただけだよ。

柳原 はあく、凄いですねえ。

平沼 まあ、実際のところ最高処分執行責任者は沢山いるけどな。

柳原 え、そうなんすか？

平沼 資格みたいなもんだしな。

柳原 そうなんですか……、じゃあ平沼さん実はあんまり偉くないとか？

平沼 おい。

柳原 すみません。

平沼 まあ、確かに偉い訳じゃないけどさ。

柳原 でも、平沼さんってあんまり怒らないし、分かりやすいって新人の中では人気ですよ。

平沼 おだてても何も出ないぞ。

柳原 いやだって、他の人とか、結構怒りますよ。

平沼 (座れそうな瓦礫を探しながら) まあ、ストレスでもたまってるんだろ、上下から挟まれて。

柳原 ああ。

平沼 だから、俺も今日から柳原君にあたるわ。

柳原 勘弁してくださいよ。

平沼 (座りながら) 冗談だよ。

柳原 もう (座る)。

しばし沈黙。

柳原 平沼さん。

平沼 何？

柳原 何って、何かやらないんですか？

平沼 え？

柳原 いやだから、何かほら、処分、そう処分はやりませんか。

平沼 いや、だから今やってるじゃない。

柳原 え？

平沼 ああ、もしかして柳原くんも、あれ？

柳原 え？

平沼 なんか、「処分」っていう言葉の響きに慣れて来たって感じ？

柳原 え、ああ、まあ。

平沼 気持ちはわかるけどさあ、まあいい、説明してやるよ。

柳原 あ、お願いします。

平沼、立ち上がって柳原に寄り、紙を見せる。

平沼 いいか、今日の担当は、E-25地区の通常処分場だ。

柳原 今僕らがいるところですよ。

平沼 ああ。そして通常処分の内容だが、これは分かるよな。

柳原 ええ。通常処分物を回収して、処分するんですよ。

平沼 まあ、実際は……ちよっと違うんだけどな。

柳原 え、しよ、処分はしないんですか？
平沼 いやまあ、するんだけどさあ。
柳原 だったらそれでいいじゃないですか。
平沼 ああもう、例えばさ、柳原くんの言う処分って、どんなイメージよ。
柳原 そりゃあ、×系のやつですよ。
平沼 ああ、そんな感じの。
柳原 ええ、だからほら（とカバンから×系機器を取り出す）。
平沼 ちよ、何で持ってきてるの。
柳原 だって、今日は処分場だって言うから。
平沼 おい、×系は特別処分だぞ！
柳原 え？
平沼 だから、通常処理には使わないの！。
柳原 嘘！
平沼 嘘なわけあるか、大体何故借りてこれた。
柳原 あ、えっと、平沼さんの名前出したら借りられました。
平沼 ったく、×系を扱えるのは処分執行責任者より上の奴だけなんだよ。
柳原 え、そうなんですか。
平沼 そうだよ！
柳原 いやあ、なんていうか、すみません。
平沼 とりあえずこれは没収！
柳原 使わないんですか？
平沼 使わない。
柳原 どうしても？

平沼 どうしても。
柳原 ちえ。
平沼 全く、担当が俺じゃなかったら、お前今頃どうなってることやら。
柳原 すみません、ホント。
平沼 まあ、いい。それで通常処分のやり方だが。
柳原 あの。
平沼 なんだ。
柳原 どうやったら処分執行責任者になれるんですか。
平沼 そんなの決まってるだろ。
柳原 え、何ですか？
平沼 お前みたいなミスをしないことだよ。
柳原 ええ。
平沼 とにかく、本気で出世したいんだったら俺の話を受け。
柳原 はくい。
平沼 まず、通常処分と特別処分の違いって知ってるか。
柳原 えっと、たしか燃えるか燃えないかですよね。
平沼 ……いや、まあ、間違っちはないけど。
柳原 え、なんか違います。
平沼 いや、メータの値が高ければ、燃えても特別処分物になるぞ。
柳原 え、ああ、ああ、そういえばそうでしたね。
平沼 お前、本当にそれ最初っから知ってたのか？
柳原 いやあ、その、パニックってど忘れしちゃって。
平沼 ど忘れするな、そんな大事なこと。

柳原 いやあ、すみません。

平沼 まあいいさ。

柳原 ということは、今僕らがいる通常処分場では燃えるものの中で、メータの数値が低いものを集めるんですよ。

平沼 まあ、通常処分場だからといって、特別処分物を集めない訳じゃないけどな。

柳原 へー、意外と柔軟なんですね。

平沼 そうか？

柳原 いえ、てっきりウチって役所みたいにお堅いところかと。

平沼 いやいや、結構硬いぞ。

柳原 ……ですよー。

平沼 まあでも、特別処分物は、ここで処分しないけどな。

柳原 え、じゃあどうするんですか。

平沼 あれだ（客席を指さす）。

柳原 え？

平沼が指さしたところにはトラックが走っている。

音響、トラックの音。

柳原 あ、え？

平沼、トラックの方向に手を振る（断る感じで）。

音響、トラックが去る音。

柳原、トラックを指&首（目線）で追う。

柳原 あれ……ですか？

平沼 ああ。

柳原 え、あれに……載せるんですか？

平沼 ああ。

柳原 なんか……普通のごみ収集みたいですね。

平沼 まあ、ね。

柳原 え、いいんですか、こんなんで。

平沼 まあ、実際ここでは処分できない訳だから、いいんじゃない？

柳原 いや、でも、ビジュアル的に、ちよつと、あれじゃないですか。

平沼 ……ちなみに、普通にここで処理するのも、ちよつとあれだと思うけど。

柳原 え？

平沼 どうやるか、柳原君、知ってるかい？

柳原 え、いや、分からないですけど、その、燃やすんじゃないですか。

平沼 ここで燃やせると思う？

柳原 ……燃やさないんですか。

平沼 ここで燃やしちゃったら大変でしょ。

柳原 そうですけど、じゃあどうするんですか？

平沼 簡単だよ。

平沼、荷物を腰からスコップを出して、瓦礫をどかした場所を掘る。

柳原 え？

平沼、更に瓦礫をどかし掘り続ける。

柳原 え、え、えー！

平沼 埋めるの、ここに！

柳原 埋めるんですか。

平沼 そう、埋めるの。ここに埋めて、で、コレかけるの。

柳原 な、なんですかコレ？

平沼 うーんと、触媒よ。

柳原 へ？

平沼 あー、生物とか苦手？

柳原 ああ、まあ、苦手ですね。

平沼 要はさ、虫なのよ、これ。

柳原 は？

平沼 こういう、虫をばら撒いとくと、分解してくれるのよ。

柳原 え……えええええー？

平沼 何、意外？

柳原 いやいやいやいや、虫って！

平沼 え、苦手？

柳原 苦手っていうか、え、信じられないですよ。

平沼 え、何で？

柳原 だって僕、~~×~~系に憧れて処理班希望したんですよ。

平沼 まあ、そのうち使う時がくるさ。

柳原 その内って、いつですか、その内って。

平沼 そうだなあ、とりあえず、▶地区に行けばだな。
柳原 えーと、それはつまり、そういうことですか。

平沼 そ、察しがいいわな、柳原君は。

柳原 はあ。

平沼 ま、まだまだこれからだって。

柳原 そんな事言ったって、

平沼 さ、そろそろ処分物来るから、ね。

柳原 はあ。

平沼 ま、積み重ねだよ、何事も。

柳原 はあ。

下手から箱が投げられてくる。

平沼 ほら、ね。さあ、作業開始だ。

柳原 え、でも

平沼 いいからほら、それ拾ってこい。

柳原 はうい。

柳原、箱を取りに行く。

平沼、荷物を持って上手へ行こうとする。

柳原 え、平沼さん、どこ行くんですか？

平沼 ここはもう撒いちまっただろ、だから次行くんだよ。

柳原 え、駄目なんですか？

平沼 そうだよ。(と言って、柳原の荷物を箱の上に置く)

柳原 え？ 何ですか？

平沼 それは追々説明してやるから、とにかく来い、時間無いぞ。
柳原 はくい。

平沼と柳原、上手へ去る。

二人、下手から登場。
荷物は下手後方へ置いておく。

石田　なんか、腹減ってきたな。

瀬波　そうですか？

石田　ああ、腹減ってきた。

瀬波　そうですか……

それでも、しばらく探す

石田　腹がへるとき、集中力落ちるよね。

瀬波　そうですね。

瀬波、袖幕から荷物を持って来て、チョコレートを鞆から取り出し食べる。

瀬波　でもほら、こうやって糖분을補給すれば。

石田　あ、ああ。

石田、俺にもくれと内心思っているが、上司の面子があるので言い出せない。

石田　あ、あのさあ。

瀬波　ん、何ですか？

石田　あの、そのチョコって、もしかして新商品？

瀬波 いえ、昔からあるやつですよ。

石田 あ、そう、そうなの。

瀬波 はい。

石田 でもさ、ほら、ちょっと変わってない？

瀬波 そうですか？

石田 そうだよ、見た目がちょっと変わってる気がするよ。

瀬波 んー、そうですかねえ……？

石田 あ、ほら、もしかしたら味もちょっと変わってるかもよ。

瀬波 えー、そんな事無いですよ。

石田 いやいや、見た目が変わってるってことは、中身も変わってるんだよ。

瀬波 でもほら、昔からあるやつですから。

石田 (かっこつけて) 変わらない味なんて、世の中にはないんだよ。

間

瀬波 ……石田さん……頭打ちました？

石田 え？

瀬波 大丈夫ですか？ (と行って頭を触る (というか掴む))

石田 いや、別にどこにも打ってないし……っっていうか、

瀬波 あ。

石田 え？

瀬波 いや……すみません。

石田 あ、ああ。

瀬波 ずれちやいますよね、頭触ったら。
石田 ……ズラじゃないよ！
瀬波 ははは……軽い冗談ですよ、冗談。
石田 ……（ふくれっ面）
瀬波 このチョコのCMの台詞ですよね、それ。
石田 ああ、まあね。
瀬波 正確には、変わらないのは、チョコの味だけ。ですけど。
石田 いろいろな意味でブラックだね。
瀬波 まあ、洒落が効きすぎてますよね。
石田 えっと、どこのメーカーだったっけ？
瀬波 あのほら、CMソングが有名な。
石田 有名な？
瀬波 ♪チョココレート、チョココレート、チョココレートは森永。の森永です。
石田 あれ、それって明治じゃ。
瀬波 森永です。
石田 そうですか。
瀬波 ええ。
石田 ああ、そう。
瀬波 はい。
石田 そうか……
瀬波 ……石田さんも欲しいんですか？
石田 え？
瀬波 チョコレート。

石田 い、いや、別に。

瀬波 そんな意地張らなくても……あげますよ。

石田 え……

瀬波 まあ……私のよりちよつと硬くて角ばっててジャリジャリしてるんですけど。

石田 へー、なんかの新商品？

瀬波 ええ、沢山ありますからね。（ニヤリ）

石田 ……って、ピンときたぞ。さては石だな。石田だけに！ ……ってバカ！

瀬波 あれ……珍しくよく分かりましたね……ダメでした？

石田 ダメだよ！

結局作業に戻る二人。

しかし瀬波、鞆から箸と一緒にタコの刺身を取り出す。

瀬波（石田に差し出しながら）はい。

石田 え？

瀬波 石田さんもお腹空いてるんでしょ。

石田 あ、ああ。

瀬波 食べます？

石田 食べる食べるー、って、これは何？

瀬波 タコの刺身です。

石田 え、タコの刺身！

瀬波 はい。

石田 すごい、俺大好物、食べていいの？

瀬波 もちろんです。

石田 わー、ごめんありがとう！

瀬波 ……全部食べちゃっていいですよ？

石田 え、瀬波の分は？

瀬波 いいんですよ、チョコレートがありますから。

石田 でもほら、せっかくだし、それにタコおいしいし。

瀬波 チョコレートのほうが好きですから。

石田 そう。

石田、タコの刺身を食べ始める。

石田 あ！

瀬波 どうかしましたか？

石田 いやあの、醤油と違ってある？

瀬波 あー、液体は持つてくるの大変ですから。

石田 あ、そう。

瀬波 ええ。溢れるので。

石田 まあ、そうだね。

瀬波 その代わり、わさびならありますけど。

石田 え、わさび？

瀬波 はい。これならこぼれませんから。

石田 そうだけど、醤油なしでわさびって……

瀬波 嫌いでしたか、わさび？

石田 いや、嫌いじゃないけど……やっぱりわさび醤油だよ。

瀬波 あらー、それは残念です。

石田 ま、さすがに醤油はね。

瀬波 こぼれますからね。では、はい（といってわさびを差し出す）。

石田 ああ、わさび。

瀬波 ええ、せつかく持ってきたんですし。

石田 まあ、そうだね。

瀬波 あ、じゃあ、私出しますよ。

石田 え、いや、そこまでしてもらわなくても。

瀬波 いえいえ、そう遠慮しないで下さい。

瀬波、タコにわさびをマヨネーズのように塗ったくる。

瀬波 はい、どうぞ。

石田 あ……ありがとうございます。

石田、我慢して食べる。

数個目で、我慢できなくなる。

石田、その後は辛そうな言い方をする。

石田 辛、辛っ！

瀬波 あ、大丈夫ですか。

石田 いや、辛い、辛い、痛い！

瀬波 そりゃ……そういう顔してますもんね。
石田 ちよ……何か飲むもの、飲むものをくれー
瀬波 じゃあ……タグラスを。

瀬波、鞆からタグラス（ペットボトル）を取り出す。
が、石田に持っていく最中に転ぶ。

瀬波 きゃあ。
石田 瀬波？

瀬波、転がっていったタグラスを拾いに行く。
石田、早く早くーって感じ。
瀬波、改めて石田へタグラスを持っていく。
石田、それを飲む。

石田 ふう、落ち着いた。
瀬波 大丈夫でしたか？
石田 ああ、大丈夫、ありがとう。
瀬波 いえいえ。
石田 しかし、分かったこともある。
瀬波 何ですか？
石田 わさびタグラスも意外といける。
瀬波 ホントですか？

石田 ホントホント。今度試してみなよ。

瀬波 いやですよ。

石田 いやいや、いけるってほんと。もういつその事メーカーで出して欲しい。

瀬波 そんな変わり種、今までも出してましたね。

石田 ほんと、メーカーの考える事がわからないよ。

瀬波 まあ……わさびタグラスが美味しいっていう石田さんもよく分かりませんが。

石田 え？

瀬波 大体……タグラスって杏仁豆腐みたいな味しません？

石田 え、ああ、まあ。

瀬波 と言う事は……石田さんは杏仁豆腐にわさびを塗ると。

石田 塗らないよ！

瀬波 ……まあ、いいです。

石田 はあ。

瀬波 じゃあ、片付けちゃいますよ。

石田 ああ……悪い。

二人、出したものを片付けて作業に戻る。

しばし無言で作業。

石田 っつかし、人が住めないと、大変だよな。

瀬波 そうですよね……ここに入れるのって、どれくらいいるんですか？

石田 さあ、耐性のあるやつって、なかなかいないからな。

瀬波 ですよー。

石田 ……そういえばさ、あの、食堂。
瀬波 ああ、はい。
石田 あそこさ、なんでマックが入ってるか知ってる？
瀬波 さあ……？ そう言えば、何でなんですか？
石田 あれね……あういうジャンクフードを食べてると、どうも耐性がつくらしいんだよね。
瀬波 え？
石田 ま、うちの隊員にマック大好き人間が多いから、っていう噂なんだけどね。
瀬波 はあ。
石田 瀬波も好きだろ、マック。
瀬波 まあ、そうですけどね。
石田 よくよく考えると、ほら、俺らが子供の頃はさ、ジャンクフードジャンクフードって騒いでたのにな。
瀬波 体に悪いとか言っていましたね。
石田 うちの親、あんまり好きじゃなかったなあ。
瀬波 マックがですか？
石田 うん、やっぱり体に悪いって。
瀬波 うちはそうでもなかったですね。
石田 あ、そうなの？
瀬波 ええ、大体、親もマック大好きでしたし。
石田 ああ、いいな、羨ましい。
瀬波 そうですか？
石田 俺なんて、何度わがまま言ったことか。
瀬波 ま、そのおかげで今こうして外に出られているなら、いいじゃないですか。

石田 そうだね。

瀬波 結局、体に悪いかどうかなんて人間には分からないですよ。

石田 え？

瀬波 いえ、いくら科学が発達しても、自然界のことはまだよくわかっていませんから。

石田 ああ、そうだね。

瀬波 ええ……

しばらく無言で作業。

瀬波 あ、また発見！

石田 結構見つかるね。

瀬波 それでも、昨日よりは少ないですよ。

石田 そうだね、いつもと比べてもかな。

瀬波 そうですね……（機械をあてて）ああ、これもだ。

石田 ほれ、袋。

瀬波 すみません。

石田 ……なんか、数値も少なめだね。

瀬波 そうですね……、あ。

石田 どうした？

瀬波 そろそろ箱がいっぱいです、ほら？

この箱ってのは、袋に入れた回収物を入れるためのもの（通常処分扱い）

石田　じゃあいくか、そろそろ。

瀬波　ええ、行きましょう。

石田　あ、でも、もう少しで午前の部が終わっちゃう。

瀬波　え、あ、そうですね……お昼、向こうで食べます？

石田　そうしようか、今日のお昼は？

瀬波　マクドナルドです。

二人、上手へ走りながら退場。

奥から声が聞こえてくる。

平沼（声） ほら、次はこっちだぞ。

柳原（声） ちょっと待って下さいよ、平沼さん。

平沼（声） 早くしろよー！

柳原（声） すみませんー！

平沼、下手から登場。

平沼 ほら、もう少しだぞー。

柳原も、機材を持って上手から登場。

柳原 これ、意外と重かったです。

平沼 それでも今日は少ないほうだぞ。

柳原 え、普段もつとあるんですか？

平沼、近くの瓦礫に腰掛ける。

平沼 まあな。

柳原 疲れた、僕ももう疲れしました。

柳原も瓦礫に座る。

柳原 ふう、結構ハードなんですね。
平沼 当たり前だ。
柳原 はあ、これが午後もですか。
平沼 ま、その前に、昼飯だな。
柳原 そうですね、今日の昼飯はどんなのですか？
平沼 そうだな……何だと思う？
柳原 えー……平沼さんの手作り弁当とか。
平沼 バカ、処理班は全員本部からの弁当なんだよ。
柳原 え、そうなんですか？
平沼 そうだよ。
柳原 まあ、そんな事はともかく、早く食べましょうよ。
平沼 そんなに楽しみか？
柳原 もちろん、お腹へってるし。それに、本部支給ってことは、ちよつと豪華なんじゃ。
平沼 んなわけあるか！
柳原 え？
平沼 マズいぞ、かなり。
柳原 うそ！
平沼 嘘じゃない嘘じゃない。まあ、食えない程ではないけど。
柳原 またまた、そんな。
平沼 まあ、食ってみれば分かるさ。
柳原 だんだん不安になってきたじゃないですか。
平沼 そう言うな、たまには当たりもあるんだから。
柳原 たまにはですか。

平沼 おう。……それに、今日は当たりだぞ。
柳原 え？

平沼、鞆からマツクの袋を出して

平沼 マクドナルドだよ。

柳原 ……え？

平沼 不満か？

柳原 いえ、なんていうか、その、
平沼 ん？

柳原 そもそもそれ、弁当じゃないじゃないですか。
平沼 まあ、たまにはそんな日もあるってことで。

柳原 いいんですか、これで。

平沼 いいんだよ、これで。

柳原 えー、いつも食ってるのに。

平沼 ま、マズいの食わされるよりいいじゃないか。

柳原 それはまあ、そうですけど。

平沼 お前も好きだろ？

柳原 ええまあ。特にえびフィレオはもう大好物で。

平沼 あれ凄いやな。

柳原 平沼さんですか？

平沼 まあな。

柳原 いいですよー。

平沼 ま、じゃあ早速食べますかね。
柳原 ですね。

平沼、マツクの袋の中身を見る。

平沼 あ。

柳原 どうしました？

平沼 いや、バーガーがさ。

柳原 どうしたんですか？

平沼 ファイレオフィッシュだった。

柳原 ……え？

平沼 まあ、本部で中身までは確認しなかったし。

柳原 えー、えびファイレオに期待してたのに。

平沼 それは俺もだけどさ。

そこへ、石田と瀬波が下手からやってくる。

瀬波 あの。

平沼 はい？

瀬波 ここですか、通常処分場は？

平沼 ええ、まあ。

石田、平沼がマツクの袋を持っているのを目にして、

石田 あ、もしかして、お昼でした？

平沼 え、ええ。これから食べようと思って。

瀬波 ああ、じゃあ間に合わなかったですか。

平沼 あ、でも、預かりますよ。ほれ、柳原。

柳原 え、あ、はい。

平沼 すみません、こいつが早く昼食べたいなんて言うから。

柳原 えー。

瀬波 あ、いえ、そのー

石田 よかったら、一緒にお昼してもいいですか？

三人 え？

石田 僕らもまだなんですよ。よろしければ、是非。

平沼 まあ、自分らは構いませんが。

石田 じゃあ、お邪魔します。

石田、瀬波にその辺に箱を置くように指示。
その間に平沼、柳原に場所を作るよう指示。

柳原 あ、どうぞ。

石田 すみません。

瀬波 ありがとうございます。

石田と瀬波、瓦礫に座る。

瀬波 すみません、お昼まで一緒に。
平沼 いやいや……こういうのは人数多い方がいいですから。
瀬波 そうですね……ありがとうございます。
平沼 ちなみに、今日のお昼は？
瀬波 ことです。

とって、瀬波がマクドナルドの袋を出す。
平沼、なんとなく自分のマクドの袋を見せる。
そしてなんとなく二人とも笑う。

瀬波 お好きなんですか？
平沼 まあ、ただ、支給ですが。
石田 ああ、そうなんですか？
平沼 ええ、処理班は本部支給なんですよ。
瀬波 へえ。
石田 君は、新人さんかい？
柳原 ああ、はい。今日が初めてで……
石田 ふうん。
平沼 まだまだ未熟者で、これから鍛えていくところでした……
石田 それは、大変ですね。
平沼 全くだ。
柳原 ちよ、ちよと……
平沼 ま、じゃあ、食べますか。

石田　そうですね。

なんとなく目をあわせてから、各自で「いただきます」的な。

平沼　あ、それはえびファイルオですか。

瀬波　ええ、私これが好きで。

平沼　僕らもなんですけどね、なにせ支給なもので。

と言って平沼、自分のバーガーを見せる。

石田　お、ファイルオフィツシュですね。

平沼　全く、たまにはウマイ昼だと思ったら、好みくらい聞いてくれて感じですよ。

瀬波　あの……

平沼　はい？

瀬波　よかったら、交換しましょうか？

平沼　え？

瀬波　いえ、私のえびファイルオと、あなたのファイルオフィツシュ。

平沼　い、いえいえいえ、流石にそれは……

このとき、柳原は少し交換してほしそうな顔をするが、平沼はすぐにそれに気がついて目でやめさせる。

しかし、瀬波はそれに気がついてちよつと笑っている。

柳原はその笑っているのに気が付き自分もちよつと笑う。

平沼、微妙な表情になるが、石田は全く気づいていない。

瀬波 そんな、遠慮しないで下さい。

平沼 いえいえ、そんな。

瀬波 私はフィレオフィッシュの方が好きですから。

平沼 そ、そうですか……？

瀬波 さ、どうぞ。

平沼 ま、まあ、じゃあ、ほら、柳原。

柳原 え？

平沼 ほら、せつかく代えて頂けるんだから。

柳原 え、は、はい、え、いいんですか？

瀬波 もちろんですよ。

平沼 ほら、早くしろ。

柳原 は、はい。

えびフィレオとビックマックを交換する。

瀬波と（やっ）石田、笑ってる。

柳原 ありがとうございます！

平沼 すみません、本当に。

瀬波 いえいえ、別にいいんですよ。

石田 なんか、親子みたいですね。

平沼 え？

石田 いや、お二人。
柳原 えー、そうですか？
平沼 いえいえ、こんな奴が息子だったら、もう過労死ですよ。
柳原 そ、そんな。

このシーンでは今までぎくしゃくしていた4人が、柳原を通じて和やかになる。空気が変わることを意識すること。適宜笑ったりとか。

ちなみにそういう雰囲気の変化に一番鈍いのが石田で、一番敏感なのが瀬波です。

平沼 本当にありがとうございます。
瀬波 いえいえ、そう気にしないで下さい。
柳原 ありがとうございます、本当に。
瀬波 いえいえ。
石田 さあ、そろそろ食べましょうよ。
平沼 ああ、そうですね。

4人、瓦礫の上に座って改めていただきます的な（バラバラで）。それが終わったら、各自食べ始める。柳原はもちろんえびフィレオにがつつく。瀬波はそれを見て笑っている。

柳原 うまい。

瀬波 よかった。

柳原（食べながら）すみませんホント、ありがとうございます。

平沼 こら、食べながらしゃべるな。

柳原 すみません。

4人笑う。ちよつと無言入る。

石田 そういえば、自己紹介がまだでしたね。

平沼 ああ、そうですね。

瀬波 私達、探索部13班所属で、こちらが石田、私が瀬波です。

平沼 あ、えっと、自分は処理班の平沼で、ほら、お前も自己紹介しろ。

柳原（ここで食べるのをやめて）すみません。僕、新入りの柳原って言います。よろしくお願ひします。

石田 よろしく、君は何ヶ月目だい？

柳原 あ、えっと、まだ3ヶ月くらいです。

石田 これからが一番きついんだぞく

柳原 え、そうなんですか。

平沼 そうだなあ

柳原 ええ！

平沼 ま、何事も積み重ねだよ。

柳原 はくい。

瀬波（間）柳原くんはさあ。

柳原 はい。

瀬波 どうして処理班希望したの？

事情を知っている平沼、吹き出す。

柳原 え、えつとお……

この柳原は、瀬波に本当のことを話そうとしたのだけど、平沼が吹き出したので判断に困っている感じ。

平沼 こいつ、面白いんですよ。

石田 へえ。

柳原 ひ、平沼さん。

平沼 いいっていいって、言っちゃまいな。

柳原 え、えくつとですね。

瀬波 うんうん。

柳原 ぶ、武器が使いたかったんですよ。

瀬波 え？

柳原 ほら、色々あるじゃないですか、そういう、その、強そうなの。

石田 あ、ああ。

柳原 なんで、その、そういうの使ってみたかったんですよ。

瀬波、笑いをこらえている。

柳原 わ、笑わないでくださいよ。

瀬波 (笑って) ごめん、ごめんね。

柳原 そんなに変なんですか？

平沼 普通じゃないっつーの。

石田 まあ、兵器が使いたいんだったら開発とか研究だからね。

柳原 あ、そうなんですか？

石田 そ。

瀬波 なんなら、異動の希望とか出してみれば？

柳原 いいやいやいや、無理ですよ。

瀬波 何で？ (↑「別にできるわよ」っていう意志が隠れている)

柳原 あんまりその、頭よくないんですし。

瀬波 え、でも

石田 ま、色々と難しいからね、新しいものを作り出すってのは。

柳原 それに、実際に使ってみたかったですし。

平沼 ここじゃ使えないけどな。

柳原 あー、早く使ってみたい。

ここでも笑うが、石田がポイント。

柳原 瀬波さんは？

瀬波 ん？

柳原 いえ、瀬波さんは、どうして探索を？

石田 おいおい、俺には聞かないのか？

柳原 いえ、そういう訳じゃないですけど……
石田 ははは、冗談だよ。
柳原 なんだ。
石田 それに俺も、瀬波が探索部に入った理由、聞いてないしな。
瀬波 そうでしたっけ？
石田 ああ。

間

瀬波 私、大学にいたんですよ。
平沼 大学？
瀬波 ええ、最初は。
柳原 え、瀬波さんって、大卒なんですか？
瀬波 違う違う、卒業はしてないのよ。
平沼 ああ、その前に。
瀬波 ええ、そうですね。
柳原 え？
平沼 馬鹿、察しろよ。
柳原 え、あ、すみません。
瀬波 いいのよ別に。大学が無くなったのよ、卒業する前にね。
柳原 あ、それって。
瀬波 そう、そういうこと。
石田 そうか。

瀬波 ええ。

石田 これで瀬波の年が分かった……

瀬波 ちよっと、石田さん！

石田 悪い悪い、冗談だつてば。

瀬波 そんな悪ふざけすると、話すのやめちゃいますよ。

柳原 え！？

瀬波 ほら、彼が怒りますよ。

柳原 え、い、いえ。

石田 悪いね、是非続けてよ。

瀬波 ふう、それで、私は芸術を専門にしていたのよ。

柳原 芸術ですか？

瀬波 そう。その中でも私がやってたのは、アーツマネジメント。

柳原 アーツ、マネジメント？

瀬波 その名の通り、芸術活動をマネジメントすることなんだけど……

平沼 お前、マネジメントって言葉は知ってるのか？

柳原 いや、その、すみません、よく分からないです。

平沼 おい。

瀬波 まあ、わかりやすく説明するとね。

柳原 はい。

瀬波 絵とか彫刻とか、後は音楽とか演劇とかをまとめてアートとしてくるんだけど。

柳原 はい。

瀬波 そういう人達ってさ、経済に疎いっていうイメージ、無い？

柳原 まあ、なんか職人って感じで。

瀬波 そうよね、商売とかに興味なさそうよね。

柳原 え、ええ。

瀬波 だから、そういう人達の為に、例えばより多くの方に芸術作品を見てもらうかとか、そういうことを一緒に考えていく仕事なのよ。

柳原 はあ。

平沼 分かったか。

柳原 まあ、なんとなくは。

平沼 なんとなくってなんだよ。

柳原 すみません。

瀬波 いえ、いいのよ。それで、芸術作品の保存と公共性ってのもその中にあるのよ。

柳原 保存と公共性……ですか？

瀬波 そう。例えば、画家が書いた絵を、どこかの社長が買って、家に飾っていたら、その絵はその人と家族ぐらいいしか見れないじゃない？

柳原 まあ、そうですね。

瀬波 だから、その芸術作品には公共性がないのよ。

柳原 ああ、

瀬波 それで、手入れとか、そういうのもきちんとされているかどうか、分からないじゃない？

柳原 そうですね。

瀬波 それが保存。私は特にその2つのキーワードを中心に研究してたの。

柳原 へえ。

平沼 本当に分かってんのか、お前。

柳原 わ、分かってますよ。

平沼 本当か？

柳原 本当ですよ。

瀬波 まあ、で、ずっと公共芸術の保存とかやってたから。

石田 それで、こういう探索部門に来たかったの？

瀬波 と言っても、メインは鑑定なんですけどね。

石田 そうなの？

瀬波 ええ。結局芸術品を保存したりとか、そういう仕事はそっちの方はメインかなーって。

石田 ああ、そうだねえ、補修業務も入るんだっけ？

瀬波 そうですね、鑑定した後に、補修して保管しますんで。

石田 ああ？

柳原 へえ、そんな事までするんですか。

平沼 当たり前だ。本部は大変なんだぞ。

柳原 へえ？

平沼 お前も行きたいんだらう？

柳原 え？

平沼 ほら、武器使いたって。

柳原 ああ？

平沼 頑張らないと、X系への道は遠いぞ。

柳原 う……が、頑張ろう……と思います。

平沼 おいおい。

四人、笑う

瀬波 そうだ、皆さん、デザート食べますか？
三人 え？

瀬波 食後のデザートですよ。

石田 あるの、そんなの？

瀬波 ええ、今出しますね。

平沼 じゃあほら、僕は片付けようか。

柳原 あ、そうですね。

石田も含めて3人、崩れた壁を片付けて元通りにする。
そしてまた瓦礫に座る。

瀬波 さあ、デザートです。

瀬波、ホタテの缶詰を出す。

石田 ホタテ！

平沼 ホタテですね。

柳原 え、これがホタテなんですか！

石田 おや、柳原くんは見たことがなかったの？

柳原 流石に生のホタテは無いですねー。

瀬波 あんまり数はないですけど、皆さんどうぞ。

平沼 え、本当にいいんですか？

瀬波 いいんですいいんです。せつかくですから。

瀬波 急に大声出さないでくださいよ。

石田 だって、醤油……？

瀬波 私別に無いとは言ってますんよ。

石田 え？

瀬波 液体はたしかに持ち運びにくいですけど。

石田 え？

平沼 あ、そうですね。わざわざすみません。

瀬波 いえいえ、そんな大したことじゃないですから。

音響、トラックの音。

平沼 ん？

小川が登場

小川が登場してから、平沼の性格（？）が微妙に変わる。

小川 おや、どうも。

平沼 （手を上げて挨拶的な）おう、おがちゃん。

小川 お、（同じく挨拶的な）おう、ヒラリー。

柳原 え、知ってる人なんですか。

平沼 バカ、こういう時は敬語を使え敬語を。

柳原 は、はあ。

小川 はっはっはっはっは！ ヒラリーらしいな。

平沼 うっせ。

柳原 あ、あの、平沼さん？

平沼 何？

柳原 それで、その、お知り合いなんですか？

平沼 おお、完璧。

柳原 はあ？

平沼 最初っからそうやって言ってくればいいのに。

柳原 あ、敬語ですか。

平沼 そうよ。

柳原 は、はあ。

平沼 こいつは小川。通称おがちゃん。

小川 おがちゃんです、よろしく。

残りの三人、それぞれよろしう的な感じ。

平沼 基本、トラックの運転してる。

瀬波 え、トラックですか？

小川 あ、はい。

石田 へえ、女性でトラックですか。

小川 学生時代に大型取ってたもんで、その流れで。

石田 へえ、そうなんですか。

小川 昔からこんな性格で、ホント、生まれつきですよ！

石田 ほう、ちなみに、生まれはどちらで？

小川 あ、大阪です！

柳原 え、大阪！

小川 はい。

柳原 大阪って、あの大阪ですか！

小川 はい。

平沼 あのって何だよ、あのって。

柳原 いやだって大阪と言ったら。

小川 まあ、住んでいる人にとっては別に変わりないのよ。

柳原 そうなんですか？

小川 まあ、ねえ。

柳原 はあ。

ここで小川、柳原の持っているホタテを見つけ！

小川 あ、ホタテ！

柳原 え、コレですか？

小川 そう、私大好物なの、ちよつとちようだい？

柳原 え、嫌ですよ。

小川 いいじゃないちよつとくらい。

柳原 え、でも。

小川 一口くらいいいじゃない。

柳原 一口って一つじゃないですか。

小川 じゃあ一個頂戴。

柳原 え、や、でも。

瀬波 あ、まだありますんで、どうぞ。(と言ってホタテを出す)

小川 お、どうもごちそうさまです！

小川、ホタテに食らいつく(箸は使わない)。

平沼 変わってないな。

小川 いいじゃない別に。

平沼 初対面の人間からいきなりホタテを奪おうとするなよ。

小川 だって、見たところ新人っぽかったし。

平沼 新人からならなんだって奪ったって良い訳じゃないぞ。

小川 そんな事言われても。

平沼 全く。

小川 大体、ヒラリーは昔から説教くさいのよ。

平沼 えー、そうか？

小川 そうよ。

なんかやりあってる二人に横から、

柳原 あのく、もう一度同じ事聞いて申し訳ないんですけど。

平沼 何？

柳原 お知り合いなんですか？

小川 ああ、同じ大学なのよ、こいつと。

柳原 え、同じ大学？
平沼 まあ、同じ年だし。
柳原 え、ってことは、平沼さんも大阪出身なんですか？
平沼 あ、いや、俺はほら、大学が大阪だったから。
石田 へえ、どちらの大学で？
小川 あ、一応阪大で。
石田 え、阪大？
柳原 え、阪大って、何ですか？
小川 知らない？
瀬波 大阪大学の略よ。
柳原 お、大阪大学？
平沼 ああ。
石田 旧帝大の、まあ三番目くらいに凄い大学だったんだぜ。
柳原 え、っていうか平沼さん、そんな凄い大学出てたんですか！
平沼 何だ、知らなかったのか？
柳原 だって平沼さん、一度も言わなかったから。
平沼 聞かれなかっただけだよ。
柳原 ……あれ、デジャヴュ？
平沼 ん？ そんな会話したっけ？
柳原 ……さあ？
平沼 覚えてないんかい！
柳原 おお、ツツコミが完璧だ。
平沼 そんな事試すな（と言ってツツコミむ）。

柳原 ああ、流石大阪のツツコミ。
平沼 大阪にいたからって〜（と、以下適当に二人でなんかツツコミ談義する）

そのツツコミ談義に次の台詞を重ねて言う。

石田 しかし、そのうち大学を知らない若者が出てくるのかね。
瀬波 です。

小川 私とかは結構年取ってるからいいですけど、二十代とかなら出てないでしょ。

瀬波 あ、私在学习中でした。

小川 あら、そうなの？

瀬波 ええ、でも結局卒業する前に。

小川 そう……

瀬波 最後の大学生です。

小川 まあ、今はこうやって働けるんだし、結果オーライよ。

平沼 何処がだよ。

小川 あら、ヒラリーいつの間に。ツツコミごっこは？

平沼 とつくの昔に終わったわんなもん。

小川 あら。

石田 いくら働けても、普通に活動できるのが我々だけでは。

瀬波 ですよね。

小川 そうかしら？

瀬波 え？

小川 私達の探しているのは何よ？

瀬波 何って、それは、

小川 じゃあその新人君。

柳原 え、僕ですか？

小川 そう、私たちの探している物は何？

柳原 それは、その……（平沼を見る）

平沼 俺を見るな、俺を。

柳原 あ、すみません。

小川 どう、分かる？

柳原 えっと、それは、今後の役に立つ資料ですけど。

小川 そうよ、だけど、それだけじゃないでしょう？

瀬波 え？

小川 探し物には、必ず探している人とか、持ち主とか、色々な人の想いがこもったものじゃない？

瀬波 ま、まあ。

平沼 おがちゃんが珍しくマトモな事を。

小川 うるさいわね。

平沼 すみません。

瀬波 確かにそうですけど、でも、だからといって、想いは伝わって来ませんよ。

小川 そうかしら？

ちよっと瀬波がムキになっている。

瀬波 私も鑑定をやっていますから。

小川 あら、鑑定までやってるの？

瀬波 はい。そうやって多くの回収物に触れていますが、使っていた人の感情とか、そういうのが含まれていないから、むしろ判断ができなくて。

小川 若いのね。

瀬波 え？

小川 まあ、そのうち分かるわよ。

瀬波 はあ。

小川 突き詰めればね、そうね、その瓦礫。

柳原 (瓦礫を持ち上げて) コレですか？

小川 そうそう。

柳原、少しだけ喜ぶ。

小川 まあ、それじゃ無くてもいいんだけど。

柳原、少しがっかりする。

小川 あなた、分かりやすいわね。

柳原 そうですか？

平沼 こいつ、すぐ顔に出るんだよ。

小川 損するわよ、その機能。

柳原 え、機能？

小川 まあ、それで、こんな瓦礫にも、設計した人、建てた人、使っていた人、見ていた人…

：色々な人が関わっていて、そしてその人達の想いがこもっているの。

柳原 まあ、確かにそうですね。

平沼 だが、おがちゃんよ。

小川 何？

平沼 それを読み取るってのは、ちと無理があるんじゃないか。

小川 そうかしら？

平沼 いやそうだろ、常識的に考えて。

小川 まあ、確かに読み取るのは無理だと思うけどね。

平沼 だろ。

小川 でもねヒラリー！。

平沼 何だよ。

小川 いつか、感じる事だけでも出来るようになる日が来ると思う。

平沼 はあ。

小川 あなたにもね。

平沼 生憎、処分一筋なんでね。

小川、笑う。

平沼 なんだよ。

小川 よくそんな事が言えるわね。

平沼 ん？

小川 もう忘れちゃったのかしら。

平沼 うるせえな。

小川 まあ、いくらヒラリーが処理一筋でも、分かると思うの。
平沼 そうか？

小川 そうよ、ヒラリーだけじゃなくて、みんなが、私もね。

平沼 えって、お前も？

小川 そりゃあ、私なんて運んでるだけなんだからね。

平沼 そりゃそうだが。

小川 あ、私そろそろ行かなきゃ。次の回収に間に合わなくなる。

平沼 そうか。

小川 じゃあね。

平沼 ああ。

小川、去りかけるが、

柳原 あ、小川さん！

小川 何？

柳原 これ、持って行って下さい。

と、柳原が特別処分物の箱を持ち上げて渡すとする。

小川 初仕事かしら？

柳原 この箱を渡したのは、小川さんが初めてです。

小川 頑張ってるね、あんた。

柳原 はい！

小川、下手に去る。

瀬波 何だったんでしょう。

石田 さあな。

平沼 すみません、自分の周りこんな奴ばかりで。

柳原 え、ちよつと平沼さん、それって僕の事も入ってたり、するよ。

平沼 えー、そんなあ。

石田 まあ、言わんとしていることは分かるけどな。

瀬波 そうですか？

石田 だってほら、俺らは孤独に仕事をしているけど、こうやって集めている物や、瓦礫にだって何かしらの思いが詰まっている、って考えれば、寂しくないだろ。

瀬波 そういう意味だったんですかね？

石田 さあ？ 少なくとも俺はそういう意味で取ったけど。

平沼 ……いや、まあ、どうだろう。

三人 え？

平沼 あいつ、最初は探索部だったんですよ。

瀬波 探索ですか？

平沼 はい。それも相模隊長と同期で。

石田 相模さんと？

平沼 ええ。

石田 へえ、じゃあかなり初期の方なんですな。

瀬波 え、そうなんですか？

石田 そりゃあ、相模さんは初期の頃からいる人だから。
瀬波 え、じゃあ、何であの人は？
石田 確かに、小川さんも隊長レベルになっているはず。
平沼 まあ、年数的にはそうだと思いますよ。
石田 何かあったんですか？
平沼 ……それが、何故か急に辞めて。
瀬波 え？
平沼 その後、ひとまず運輸部に、ってことだったんですけど、今までそのままに。
石田 怪我とかではなく？
平沼 いえ、かなり落ち込んでいましたけど。
石田 なんて言うか、ナイーブになった、とか言う奴じゃないんですか？
瀬波 確かにたまにそういう隊員はいますけど。
平沼 でも、トラックの運転は続けているから、もう何なのか。
柳原 ああ、そうですね。
平沼 理由を聞いても、教えたくないって言われて。
柳原 嫌われてたんですか？
平沼 誰に対しても同じ事言ったらしいからな。
柳原 お、よかったですね平沼さん。
平沼 何がじゃ（ツッコミ）。
柳原 いてっ、こんどこそデジャヴユ？
平沼（無視）何かあったとしか思えないんだがなあ。
瀬波 実際、嫌になっただけかもしれないよ、肉体労働だし。
平沼 とにかく、誰にも理由は分からない。

柳原 ……相模隊長、でしたっけ？

石田 え？

柳原 いや、その、同期だったって方。

平沼 ああ、確かにそう言ったが。

柳原 その方なら知っているんじゃないですか？

平沼 え、そうか？

柳原 だって、同期でしかも同じ部ですよ。仮に分からなくても、断片的に何か知ってたりとかするんじゃないですか？

石田 まあ、確かに。

平沼 だが、聞いたって教えてはくれないだろう。

柳原 ……まあ、そうですね。

平沼 ああいう事言われると、気になるんだよね……

全員で考えこむ。

石田の時計（つばいやつ）のアラーム音が鳴る。

石田 おっと、我々もそろそろ時間のようだよ。

瀬波 そうですか……あ、ホントだもうこんな時間。

石田 それでは、私達はここらで失礼します。

平沼 そうですか。

石田 お昼、楽しかったですよ。

平沼 こちらこそ。

柳原 えびファイルオ、ありがとうございました！

瀬波 どういたしましたして。

石田 それでは、また。

平沼 また。

石田と瀬波、去る。

平沼 さて、じゃあ、俺らも始めるぞ。

柳原 あ、はい。

ゴミとか片付ける。

聞こえる必要はないが、下記のような台詞。

平沼 ほら、ゴミはそこ。

柳原 あ、はい。

平沼は箱の中身を穴の中に、などという動作。
瓦礫も元通りに戻しておく。

平沼 じゃあ、俺先そっち行ってるぞ。

柳原 あ、はい。

平沼、下手に去る。

柳原、片付けを終わって後を追う。

石田、サザンの「TSUNAMI」を歌いながら下手より登場、探索をしている。

「あんなに好きな女性に〜」あたりからノリに乗る（ためたりとか）。

「闇に彷徨う運命」で瀬波が登場するも、呆れて聞いている。

一番を歌い終わったあたりで、瀬波の台詞。

瀬波 上手いですね。

石田 ん、そんな事無いよ。

瀬波 何でしたっけ、その曲。

石田 知らない？

瀬波 ええ。

石田 サザンの TSUNAMI って曲なんだけど。

瀬波 んん、聞いた事無いですね。

石田 そうか。

しばし間。

石田 そういえばさ、瀬波。

瀬波 はい？

石田 瀬波って、彼氏とかいるの？

瀬波 ……そういう質問はセクハラになりますよ？

石田 え、ウソッ。

瀬波 本当です。

石田 そ、そう。

瀬波 石田さんこそどうなんですか？

石田 え？

瀬波 彼女、というか、奥さんとかいらっしやらないんですか。

石田 ああ、俺は独身。彼女もいないし。

瀬波 そうですか。

石田 なんかさあ、俺って寂しいと駄目なのよね。

瀬波 は？

石田 だから、その、かまって欲しいっていうか、分かる？

瀬波 はあ。

石田 恋人がいてもさ、なんていうか、一緒にいないと寂しくてね。だから、たまに会えた時
がやけにうれしかったり。

瀬波 まあ、分からないことは無いですけど。

石田 でも、かといってべたつくと嫌われるからなあ〜

瀬波 しつこい男は嫌われやすいですよ。

石田 そうなのよ、俺は甘えたいだけなんだけどなあ……

瀬波 ……石田さん。

石田 何？

瀬波 男の人って、全員石田さんみたいなんですか？

石田 さ、さあ？ だけど、俺はあまり自分のこと特殊だと思わないけど。

瀬波 そうですか。

間

瀬波 あれ？

石田 どうした？

瀬波 サザンって、あの、桑田さんですか？

石田 え、ああ、まあ。

瀬波 桑田さんなら少しだけ知ってます。

石田 あ、そうなの。

瀬波 ええ、確か、ジョニーが波に乗る、でしたっけ？

石田 いや……そうじゃなくて。

瀬波 あれ、違いましたっけ？

石田 近いけど、正確には「

瀬波 あ、波乗りジョニー！

石田 あ、ああ……そうだね。確か（とイントロを歌いだす）。

瀬波 あ。

石田 え？

瀬波 別に歌わなくていいですから。

石田 そう？

瀬波 はい。

しばし間。

しかし石田、「波乗りジョニー」をサビから口ずさんでいる。

瀬波は、上手の辺りを掘っている。

瀬波 あ！

石田 今度はどうした？
瀬波 なにか埋まってる。
石田 掘ってみるかい？
瀬波 はい。

石田、瀬波にスコップを手渡す。
瀬波、瓦礫の間を掘る。

瀬波 あれ？
石田 どうした？
瀬波 なにか、箱みたいなのが。
石田 箱？
瀬波 ええ。
石田 ちよつと見せて。

石田、瀬波の側へ移動。

石田 金属製……かな？
瀬波 開けてみます？
石田 うん。

瀬波、慎重に金属製の箱を開ける。

瀬波 本……ですかね。
石田 そうみたいだね。

しばし間。

石田 読んでみる？

瀬波 いいんですか？

石田 まあ、ちよっとくらいならいいんじゃないかな。

瀬波 そうですか。

石田 俺は、この近くを探しているから。

瀬波 はあ。

石田 何か関係ある物も出てくるかもしれないし。

瀬波 分かりました。

瀬波、本を読む。

石田、舞台センター下手寄りで付近の探索を再開する。

瀬波、途中まで読んで急に涙目になる。

石田を呼ぼうとするが声が出ない（泣くのを堪えているので）。

しかし石田、何か凄いものを発見してしまったらしく、瀬波の変化に気が付かない。

瀬波、だんだん激しく泣き出す、そして石田も、だんだん激しく驚いて興奮していく。

石田 おい、瀬波、ちよっとこっち来てみる。

もちろん瀬波、石田の呼びかけに応えられる訳もなく、

石田　おい、瀬波。

ここで石田が瀬波の方を向き、

石田　って、瀬波？　おい、どうした、大丈夫か！

自分の探索をほっぽり出して（でもちよつと気にして）瀬波の元へ。

石田　おい、瀬波、瀬波。

しかし瀬波は無反応、石田すぐ近くに寄った時に、

小川（声）　いけないんだ。

石田　誰だ！

小川（下手から登場しながら）　女の子泣かせちゃ

石田　小川さん。

小川、本に気がつき、

小川　彼女。

石田　え？

小川 彼女、どうしたの？
石田 え、ああ、その、あの本を読んで。
小川 うん、それ、どうしたの？
石田 あの、そこから掘り出してですね。
小川 ああ、その箱に入ってたの。
石田 ええ。
小川 そう。

小川、ついでに石田の掘出していたものに気が付き、近づく。
石田も、小川の近くに移動。

石田 え、ちよつと小川さん。
小川 これ、あなたが見つけたの？
石田 ええ、まあ。
小川 ふうん。

小川、とりあえず埋め戻す。
石田 さ小川のバトル、スタート。

石田 ちよつと小川さん！
小川 あのね、こいういのは埋めていたほうが、
石田 だからって、探索業務では、
小川 そんなの関係無いでしょ、大体ね、

石田 いやでも、せっかく見つけたんですから、
小川 せっかくって何よ、せっかくって、

バトル中にいつのまにか瀬波、泣き止んでいる。
そしてバトルの決着を小川がつける。

小川 シャラーラープ！

石田、黙り瀬波もびっくりして小川の方を涙目で見る。

小川 ああ、泣かなくていいから、ね。

瀬波 あ、はい。

小川 全く。

小川、瀬波に近づきながら、

小川 ああ、やっぱりそれか……

瀬波 え？

小川 それね、私が見つけたのよ。

瀬波 この本ですか？

小川 まあ、それもそうだし、あと、そっちにあったのも。

石田 あ、ああ。

瀬波 え？

小川 ん？
瀬波 そっちにあったのって？
小川 ああ、まあ、その、あれよ。
瀬波 あれって？
石田 いや、だから、その、人の
小川 ハイストッパー！
石田 え？
小川 それ、彼女に言う気？
石田 ……？
小川 言・う・気・？
石田 駄目……ですかね。
小川 駄目でしょ。
瀬波 ……言って下さい。
石田 瀬波。
瀬波 私だって、探索部の一員ですから。
小川 いいの？
瀬波 はい。
小川 だってさ。
石田 え、ってどうか、え、僕からですか。
小川 だってあんたさっき言おうとしたじゃない。
石田 いや、でも。
小川 私、悪者にはなりたくないから。
石田 ちよ、悪者って。

瀬波 どっちでもいいから、早く言って下さい！

間

小川、鋭い眼力で石田を睨みつけている。

石田 あ、あの、骨がね。

瀬波 え？

石田 人の骨がね、埋まってたのよ。

瀬波、涙目に。

石田 ああ、いや、その、泣かなくていいから、な！

瀬波 泣いてません！

石田 泣いてるじゃない。

瀬波 別に泣いてないです。

石田 でも、

小川 アンタしつこい！

小川、石田にツッコミ。

石田 いてっ。

小川 これだから男は。

石田 ちよ、男女差別はやめてくださいよ。

小川 いいじゃない別に。
石田 良くないですよ。
瀬波 あの！
二人 はい。
瀬波 その、それって、その、コレと関係あるんですか。
石田 え？
小川 まあ、そうね。
石田 え、そうなの？
瀬波 やっぱり。

石田、正直空気。
何度も会話に加わろうとしますが、上手くいかずに、そのうち拗ねる

小川 飲み込み早いね。
瀬波 一応東大だったり。
石田 え、そうなの？
小川 ふうん、そうなの。
瀬波 これ書いたのって、やっぱり。
小川 まあ、そうね。
石田 え、俺まだ読んで、
瀬波 これ、読んだことあるんですよね。
小川 そりゃあ。
瀬波 もしかして、探索部にいたときに。

小川 そうね。
石田 え？
瀬波 埋めたのも。
小川 ええ。

間

瀬波 そっか、そうですよね。
小川 何が？
瀬波 いえ、別に。
小川 そう？
瀬波 はい。
石田 え、ちよつと、え？
小川 ある意味ね、合理的じゃないとやっていけないからね。
瀬波 ……何でって、聞きちゃ駄目ですか？
小川 ……聞いてもいいけど。
瀬波 けど？
小川 答えられないわよ。
瀬波 ……そうですか。
小川 うん。
瀬波 あの。
小川 ん？
瀬波 この日記、貰ってもいいですか。

小川 いいけど……
瀬波 けど？
小川 それなら、まず私に渡しなさい。
瀬波 え？
小川 そんなデカいの、持ち込めないでしょ。
瀬波 あ。
小川 私なら大丈夫だから。
瀬波 まさか、このために？
小川 ん？
瀬波 昔、探索部だったんですよね。
小川 え？
瀬波 いえ、小川さん。
小川 え、ウソ。
瀬波 平沼さんがおっしゃっていたもので。
小川 ヒラリーが？
瀬波 はい。
小川 ほう、へえ、ははははは。
瀬波 どう、どうされました？
小川 あのね、ヒラリーね、昔探索部だったの。
瀬波 え、平沼さんも？
小川 まあ、結構早く辞めちゃったんだけどね。
瀬波 え？
小川 探すのだからって言って。

瀬波 え、そんな理由で？

小川 っていうのと、やっぱり、私の件があったから。

瀬波 え？

小川 素直じゃないから、ヒラリー。

瀬波 はあ。

小川 無駄にプライドは高いのよ、ああ見えても。

瀬波 そうなんですか。

小川 でも、見つけたのは私でも、彼も私の話聞いたら、ね。

瀬波 え、でも、小川さんが何で辞めたか分からないって。

小川 またまたヒラリーったら。一番良く知ってるのは、ぐっ（伸びる）あんただろうにって。

瀬波 知ってるのは相模隊長だけだって。

小川 ああ、ガミー君？

瀬波 ガミー君？

小川 後輩だったのよ、同じ大学同じサークルの。

瀬波 あ、そうなんですか。

小川 そうそう。たまにサガミー君って呼んでたこともあったけど。

瀬波 そのままじゃないですか。

小川 彼ってさ、純粋な大阪人のくせに面白くないのよね。

瀬波 あー。

小川 黙ってればイケメンなのね。

瀬波 もったいないですよ。

小川 でも、かなり若く見えるのよねー。

瀬波 え、ああ、まあ。

小川 今度、若さを保つ秘訣とか聞いておいてくれない？
瀬波 教えてくれますかね。
小川 きつとね。

間

小川 じゃあ、私行くわ。
瀬波 そうですか？
小川 うん。

少し間

瀬波 あ、じゃあ、最後にひとつだけ、いいですか？
小川 いいけど？
瀬波 あの、大阪って、いい所ですか？
小川 そりゃもちろん、当然よ。
瀬波 ですよ。
小川 どうしてそんな事？
瀬波 ……この人も行きたかったのかなって。
小川 きつとね。
瀬波 どうやって行くつもりだったんですかね。
小川 それは分からないけど、でも、歩いてでも大阪まで向かっていたと思う。
瀬波 ……ですかね。

小川 そうに決まってるわよ。
瀬波 決めつけは良くないと思いますよ。
小川 まあ、これくらいいいじゃないの。

二人、笑う。

小川 じゃあ、こんどこそ。
瀬波 あ、これ、よろしくお願いしますね。

本を渡す。

小川 はい、たしかに受け取りました。
瀬波 じゃあ、また今度。
小川 そうね、帰ったら電話するわ。
瀬波 あ、じゃあ番号。
小川 ああ、そうね、交換しなきゃ。
瀬波 じゃあ、(機械を出す)
小川 うん。(同じく機械を出す)

二人、謎の機械をくっつけて軽く操作する。

小川 よし、じゃあ気をつけて。
瀬波 小川さんこそ。

小川、去りかけるが

小川 あ、そうそう。

瀬波 何ですか？

小川 彼、ずっと拗ねてるわよ。

石田、拗ねて端っこの方でなんか掘ってる。

瀬波 ずっと空気でしたからね。

小川 正直いらん子だったわね。

石田 いらん子ってなんですか、いらん子って。

小川 だって、空気だったし。

石田 二人で僕だけのけ者にするから。

瀬波 そうやって僻むのは良くないと思いますよ。

石田 くっ、まさか後輩に諭されるなんて……

小川 じゃあまあ、お二人とも元気で。

石田 あ、はい。

瀬波 それじゃあ。

小川 じゃあね。

小川、去る。

石田 よし！ 決めた。

瀬波 何ですか？

石田 俺はやってやる、見つけて見つけて見つけまくって、隊長になってやる！

瀬波 まあ、程々にしておいたほうがいいですよ。

石田 何故だ！ 行くぞ瀬波、探して探して探しまくるぞ！

瀬波（独り言）単純だなあ。

石田 何か言ったか？

瀬波 いえ、何も。

石田 よし、じゃあやるぞ。もっと凄いもの、見つけるぞ！

瀬波 はい！

二人、笑う。

音楽が鳴り始める。

石田 ところで、瀬波。

瀬波 はい？

石田 さっきの、その、骨、持っていつちや駄目かな？

瀬波 はあ？

石田 いや、あれ持って行ったら、成績上がるかなーって。

瀬波 何言ってるんですか、駄目に決まってるじゃないですか。

石田 でもほら、一応報告は義務だし。

瀬波 石田さん。

石田 何ですか？

瀬波 石田さんは、空気を読む練習したほうがいいと思いますよ。

石田 え、ちよつと何、それどういうこと。

瀬波 さ、そろそろ次の担当場所に行きましようよ。

石田 え、でも、これ。

瀬波 それ以上その件に触れると、私また泣いちゃいますよー

石田 えー、それは勘弁してよ。

瀬波 業務中に女を泣かせたって言われたくなかったら、行きましよう。

石田 そんなあ。

瀬波 早くしないと私が先見つけちゃいますよ。(走って退場)

石田 あ、待て。俺のほうが先だ、こら速い、速いっつーのー(追いかけて退場)

しばし間

平沼と小柳、箱を抱えて登場。

箱をおいて瓦礫に座り、休憩モードに。

平沼 どうした。

柳原 え？

平沼 いやなんか、元気ないぞ。

柳原 ああいえ、さっきの事が気になっちゃって。

平沼 ……俺も昔はそうだったなあ。

柳原 平沼さんでもですか？

平沼 あいつが辞めるって言い出したときは、まあな。

柳原 平沼さんにもそういう事があるんですね。

平沼　なんだその言い方は。

柳原　いえ、別に大した意味は。

平沼　……まあ、今は元気に働いてるし、毎日会うしな。

柳原　……もしかして平沼さん。

平沼　何だ？

柳原　小川さんに会うために、処理班希望したんですか？

平沼　……まあ、それもあるが。

柳原　え？　じゃあもしかして！

平沼　勘違いするなよ、最大の理由は他にあるからな。

柳原　何ですか？

しばらく間

柳原　平沼さん？

平沼　何処かの馬鹿みたいに、処理班っていう響きに憧れて来たんだよ。

柳原、一瞬意外な顔をするが直ぐに笑顔に。

以下のような慣れあいを（聞こえる必要はないが）。

柳原　平沼さんですか。

平沼　悪いか。

柳原　いやあ、僕達気が合いますね。

平沼　うるせえ。

柳原、平沼にツツコミみたいなものを（じゃれあい？）

平沼 俺に触るな！

柳原 いいじゃないですか、気の合う者どうし。

平沼 離れる馬鹿。

柳原 平沼さくん。

平沼 うるせえ、仕事だ仕事！

柳原 ちよっと、平沼さん。

しかし、平沼も笑っている。

柳原も当然笑っている。

そのままカーテンコールへ。

了